
その他 FD 若手教員が看護学科 FD 委員会活動より得た学び

Learning from Faculty Development Committee activities of junior faculty

川原理香 太田裕子 寺尾洋介 須藤麻衣 阿達瞳
竹内博美 伊藤美千代 阿部桃子 宮本千津子

Rika KAWAHARA, Hiroko OHTA, Yosuke TERAO, Mai SUDOH, Hitomi ADACHI,
Hiromi TAKEUCHI, Michiyo ITO, Momoko ABE, Chizuko MIYAMOTO

〈その他〉

FD若手教員が看護学科FD委員会活動より得た学び

Learning from Faculty Development Committee activities of junior faculty

川原理香 太田裕子 寺尾洋介 須藤麻衣 阿達瞳
竹内博美 伊藤美千代 阿部桃子 宮本千津子

東京医療保健大学 医療保健学部 看護学科

Rika KAWAHARA, Hiroko OHTA, Yosuke TERAU, Mai SUDOH, Hitomi ADACHI
Hiromi TAKEUCHI, Michiyo ITO, Momoko ABE, Chizuko MIYAMOTO

Division of Nursing, Faculty Healthcare, Tokyo Healthcare University

要 旨：本学科では、毎年看護学科FD（Faculty Development；以下FD）委員会を中心に、看護学科FD研修会と年度末の看護学科活動報告会を開催し、教育力・研究力の向上や教育活動の共有に努めている。平成25年度は助教・助手（若手教員）が中心となって2回のFD研修会と年度末の活動報告会を実施した。平成25年度の委員会活動および若手教員による自主的な振り返りの会を通して、FD委員会に所属する若手教員は目の前のことだけでなく組織全体を捉えて相手に「伝わる」情報発信しなければならないことを学んだ。若手教員には、個々人の学びだけでなく、組織への貢献について考え、学科のFD活動に携わっていく覚悟が求められている。今後は、委員会活動の質向上と課題の達成に向けて継続的に取り組むとともに、他者評価も得ながら自分たちの成長過程と成長段階を見直し、取り組んでいくことが看護学科のFD活動につながると考える。

キーワード：若手看護学教員、FD、委員会活動

Keywords：

はじめに

平成18年に改正された教育基本法第9条において、教員は、「自己の崇高な使命を深く自覚し、絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努めなければならない。」「養成と研修の充実が図られなければならない。」と規定されており、平成19年に大学設置基準が改定され、FD（Faculty Development；以下FD）の実施は義務化されている。

このような中、本学科では、毎年看護学科FD委員会を中心に、看護学科FD研修会（以下FD研修会）と年度末の看護学科活動報告会（以下活動報告会）を開催し、教育力・研究力の向上や教育活動の共有に努めている。平成24年度から平成25年度の看護学科FD委員会は、構成員の約半数を助教・助手（以下若手教員）が占めている。平成25年度は平成24年度から継続している委員が多いため、24年度の各自の課題を基に、役割分担を決め、若手教員が中心となって2回のFD研修

会と年度末の活動報告会を開催した。1年間の委員会活動を通して、FD委員会に所属する助教・助手（以下FD若手教員）は、適宜集まり、「達成できたこと」「今後の課題」を振り返るとともに、参加者からの助言や指摘について共有をはかってきた。平成25年度の委員会活動および自主的な振り返りの会を通して、FD若手教員は何を学んだかを明らかにする。

目 的

平成25年度FD若手教員が、研修会および報告会の企画・運営に携わった経験からどのような学びがあったかを明らかにすることを目的とする。

平成25年度看護学科FD委員会の構成

本学科のFD委員会は教授（委員長）1名、准教授（副委員長）1名、講師1名、助教1名、助手5名で構成された。平成24年度から継続している委員は、委員長

と助手2名を除く6名であった。

研修会および報告会は3名(助教1名、助手2名)の担当者(以下企画担当者)を中心に、企画・運営を行った。

平成25年度看護学科FD委員会の主な活動

1. 平成25年8月30日 第1回FD研修会開催

テーマ:「へこたれない看護師育成への取り組み」

ねらい:本学科の理念と方針の達成に向かい、学科教員が学生とともにチームとして発展・協働していくための教育力・研究力の向上をはかる。

参加者:看護学科教員42名、事務局職員2名

2. 平成26年3月13日 第2回FD研修会開催

【第1部】

テーマ:「臨床との協働に関するワークショップ」

ねらい:現在の臨床との協働の現状と課題を洗い出し、これから目指す臨床との協働像に向けた方策を教員間で共有し、今後の臨床との協働に生かす。

参加者:看護学科教員41名、事務職員1名

【第2部】

テーマ:「若手教員(助教・助手)の研究力向上のための研修」

ねらい:若手教員が研究力を向上させるために、自己の研究を着実に遂行・発展するための具体的方策を得る。

参加者:若手教員14名、講師以上6名(アドバイザー:教授2名、准教授3名、講師1名)

3. 平成26年3月14日 平成25年度活動報告会開催

ねらい:平成25年度看護学科で行われた、教育・研究・委員会・FD活動を報告し合い、情報を共有するとともに、看護学科教員および大学職員と看護学科のこれからの活動について語り合う場とする。

参加者:看護学科教員42名、学長、事務職員3名

※平成25年度の企画・運営に関するアンケートを実施した。

FD若手教員の振り返り(表1・2)

企画担当者を中心に、第1回FD研修会終了後、FD若手委員の振り返りの会を自主的に行った。その結果をふまえ、第2回FD研修会および活動報告会の企画・運営に取り組んだ。

活動報告会終了後、若手FD委員の中から、FD委員会活動に対する意見を共有したいという申し出やFD研修会および活動報告会をFD若手教員が中心となっ

て企画・運営をすることで見出した課題を共有したいという申し出があった。平成25年度の企画・運営に関するアンケート結果を参考資料にしながら、平成26年3月25日にFD若手教員5名で集まり、再度FD若手委員の振り返りの会を行った。

振り返りの会で話し合われた内容を文章化し、「達成できたこと」「課題に残ったこと」に分けて整理した。具体的な内容から「達成できたこと」「課題に残ったこと」を【 】で示す。

1. 1年間の活動を通して達成できたこと

達成できたことは、企画担当者の企画案から教育活動報告をする機会を設けることができたことや委員会報告を提案し、プログラムに追加するなど、【FD研修会・活動報告会の企画提案】ができたこと、今年度の研修計画は全て実施し、報告会では多くの教員が日々の活動を伝える場を提供できたことから【FD研修会・活動報告会の開催】、前倒しで準備計画を立てたことで、スケジュールの変更や企画の追加募集ができたことや第1回研修会時の反省をふまえ、第2回目は早々に事務手続きができたことなどから【余裕をもった準備計画の検討・実施】、会議開催日と看護学科全体への情報発信過程を意識してスケジュールを随時変更したことなどから【過程を意識した学科全体への情報発信】、研修会と報告会の違いを意識したメール配信や応募先やメールの宛先の統一など【情報混乱を回避する意識的な発信】、事務職員の参加に向けた早目の声掛けなど【早目の開催日時周知】、事前準備や時間的余裕を考慮した【余裕をもった当日準備】、第1回研修会では司会者との調整不足が課題だったが活動報告会では随時司会者と確認しながら運営ができたことから【司会者との当日運営調整】、詳細な当日運営スケジュールと役割分担表を作成することで、各自が役割を果たし、スムーズな運営につながったことから【役割と時程の明確化によるスムーズな運営】、情報を共有し臨時で担当を変われるように意識して行うことで滞ることなく準備が進められたことから【役割の分担と補完】があげられた。

2. 今後の課題

課題に残ったことは、同じ情報が複数回発信されたことや最終決定資料がどれかわかりにくいという意見があったこと、企画の趣旨・目的に関する説明が不十分であったことや研修会と報告会のメールを分けても、研修会と報告会の違いが伝わっていなかったことなどから【情報の精選と明確な伝達】、領域責任者会議や学科全体会議での報告、メール配信で情報共有するこ

表 1 FD 若手教員の振り返り：達成できたこと

達成できたこと	具体的な内容
FD 研修会・ 活動報告会の企画 提案	<ul style="list-style-type: none"> 企画担当者の企画案の内、教育活動報告は、委員長から担当教員に依頼し、報告につなげられた。 報告会の枠組みに委員会報告を追加することをFD委員会に提案した。その結果、委員会報告は目標管理担当の企画として、追加されることに決まった。 企画担当者は10月に第1回研修会修了後に集計した「今後ディスカッションしたい内容」をふまえて、5つの企画案を委員会に提案した。いくつか採用された。 活動報告会は、例年通りのプログラムだけでなく、応募内容を優先して構成することができた。
FD 研修会・ 活動報告会の開催	<ul style="list-style-type: none"> 今年度の研修計画は全て実施することができた。 企画・運営はできた。 報告会を開催することで、多くの教員が日々の活動を伝える場を提供することができた。 活動報告会の企画は各委員会活動の報告が加わり、「良かった」という意見が聞かれた。研修会の企画も「良かった」という意見が聞かれた。
余裕をもった 準備計画の検討・ 実施	<ul style="list-style-type: none"> 後期は実習やテスト期間などの看護学科のスケジュールを加味し、前倒しで準備計画を立てたため、少し遅れても準備に支障は出なかった。 第1回FD研修会に比べ、企画募集など早目に声掛けをすることで、募集期間の延長ができ、応募数が増えた。 第1回研修会では飲食物手配のための事務手続きが遅かったため、第2回研修会では推定参加人数で稟議書等を提出し、スムーズに手配できた。
過程を意識した 学科全体への 情報発信	<ul style="list-style-type: none"> 会議開催日と看護学科全体への情報発信過程を意識してスケジュールを随時変更した。 委員長から各会議の席で伝達して欲しい内容は、その会議の直前に委員長へ依頼した。
情報混乱を回避す る意識的な発信	<ul style="list-style-type: none"> 研修会の企画および報告の公募は、企画担当者は1通のメールで行おうとしていたが、違いが分かりにくいという委員の指摘を受け、研修会と報告会に分けて募集した。 応募者が混乱しないよう、また、担当者間で情報が錯そうしないよう、応募先やメールの宛先を一人の担当者に統一した。
早目の開催日時 周知	<ul style="list-style-type: none"> 第1回研修会では、事務局への声掛けが遅くなったため、早めにFD委員会委員長から声かけを行い、多くの事務職員の方々の参加が得られた。
余裕をもった 当日準備	<ul style="list-style-type: none"> 当日は余裕をもって集合したため、準備が余裕をもって行えた。 当日準備が簡便になるように、前日までに飲食物を2日間用に分けたため、スムーズに準備ができた。
司会者との 当日運営調整	<ul style="list-style-type: none"> 第1回研修では、司会者との打ち合わせが不十分であったこと、時間の変更など補佐する者がいなかったが、報告内容によって座席での発表に切り替えるなど、司会者と打ち合わせながら臨機応変に対応できた。
役割と時程の明確 化によるスムーズ な運営	<ul style="list-style-type: none"> 第1回研修会では昼食のアナウンスや移動、片付けのアナウンスがスムーズに行えなかったため、詳細な当日運営スケジュールと役割分担表を作成することで、各自が役割を果たし、スムーズな運営につながった。
役割の分担と補完	<p>急な仕事などが入った際は、情報を共有し臨時で担当を変われるように意識していた。</p>

表2 FD若手教員の振り返り：今後の課題

今後の課題	具体的な内容
情報の精選と明確な伝達	<ul style="list-style-type: none"> ・同じ情報が複数回発信された。 ・早めに情報共有できるようにプログラムを案の段階から配信したが、逆にわかりにくくなった人もいた。開催直前を望む声も聞かれた。最終決定資料がどれかわかりづらいという意見があった。 ・看護学科FDの年間の目標を示していなかったため、企画の目標も不明確であった。 ・企画の趣旨・目的に関する説明が不十分であった。 ・研修会と報告会のメールを分けても、研修会と報告会の違いは伝わっていなかった。 ・企画の立案をもっと練るべきだった。 ・看護学科教員に企画の意図や目標が伝わるように、企画書を作成すれば良かった。 ・プログラムは公募し、応募された内容でプログラムを構成すると説明していたが、実際は例年通りの報告も追加されており、企画の説明が不十分であった。
十分な説明と同意の確認	<ul style="list-style-type: none"> ・領域責任者会議や学科全体会議での報告、メール配信で情報共有することで内諾を得たつもりになっていた。 ・昨年度までに準ずることを委員会内で共有をしたが、委員会メンバー以外の教員、特に新任教員への配慮があると良かった。 ・昨年度は、公募でない報告者に対し、担当者が事前に打診をしていたが、今年度は事前の打診なく、一斉メールで知らせたケースがあった。 ・報告者に報告依頼の説明が不十分であったり、時期的に遅かった。
企画に対する責任の自覚	<ul style="list-style-type: none"> ・報告会の企画の責任者が不明確であった。 ・報告方法等、昨年度までを参考にすることが多々あり、紙面報告か、口頭での報告か企画段階で明確になりきっていない部分があった。
準備における全体を把握する視野	<ul style="list-style-type: none"> ・スケジュールを随時更新し、共有することはできたが、全体像を捉えながらの計画にはなっていなかった。 ・目の前のことをこなすことで精一杯で、全体像や参加者への配慮ができていなかった。

とで内諾を得たつもりになっていたや新任教員への配慮不足などから【十分な説明と同意の確認】、報告会の企画の責任者が不明確であったことなどから【企画に対する責任の自覚】、目の前のことをこなすことで精一杯で、全体像や参加者への配慮ができていなかったなど【準備における全体を把握する視野】があげられた。

3. 学びとして整理されたこと

「達成できたこと」「課題に残ったこと」から、FD若手教員の学びは以下の6つに整理された。

- 1) FD委員会の企画担当者として連絡・報告の方法を理解し、相手に伝わるように伝えるためには、目標を明確にし、企画の検討と資料の準備が必要であることを学んだ。
- 2) 誰でも、共有できるように口頭ではなく、紙面で伝えることが必要であること。逆に紙面（メール含む）で伝えるだけではニュアンスが伝わりきらないので、口頭で伝えることの重要性を学んだ。
- 3) 何を、どのような方法で伝えれば相手に「伝わるか」を考え、情報発信しなければならないことを学んだ。
- 4) 参加者から良かった点や改善点に関する様々な助言や指摘を受けたことから、担当者というものは、良い反応も悪い反応も受け止める覚悟が必要であることを学んだ。
- 5) 「例年通り」でも、毎年全く同じではないので、その都度説明するとともに、共通理解ができているかを確認しなければならないことを学んだ。
- 6) 良い研修会というのは、当日運営だけでなく、企

画段階から伝える力・段取りを組む力が必要であることを学んだ。

考 察

1. FD委員会活動のプロセスと成果としての学び

看護学科FD委員会は、学科の成長につながる企画を運営したいと願い、研修会の企画・運営を行っている。FD若手教員の振り返りの中で【FD研修会・活動報告会の開催】や看護学科の活動報告の中に委員会報告がないことに疑問を抱き、新しい企画を提案するなど【FD研修会・活動報告会の企画提案】は、若手看護学教員のためのFDガイドライン¹⁾の「委員会などの大学運営において積極的に役割を果たす」ことにつながっていたと考える。企画・運営力が未熟であり、企画の構成やねらい、責任の所在を確認しながら準備を進めることや大学の組織全体を捉えることができなかったという課題も残った。しかし、年間の活動を通し、徐々に視野が広がったと考える。

同様に、平成25年度当初は、運営や準備での段取り不足に多くの課題が残されていたが、1年間を終え、振り返ると看護学科FD委員会としての情報発信に関する学びが多く得られた。これは、平成25年度当初は、研修会を実施することだけに目が向いていたが、年間の活動を通してそれらを解決出来たため、自分たちのことだけではなく、組織の中での自分、組織への働きかけというように視野が広がってきたためだと考える。FD若手委員は、何を、どのような方法で伝えれば相手に「伝わるか」を考え、情報発信しなければならないことを学んだ。これはFDガイドライン¹⁾の

「組織における自己の役割を理解する。」や「職務における連絡・報告の方法を理解する。」ことにつながっていると考える。

2. 若手教員におけるFD委員会活動の意義

FD若手教員は、委員会活動の中で必要となる能力を明確に捉えていたわけではないまま、委員会活動に携わっていた。1年間の活動の中で、教員として、組織人としての能力不足を痛感したため、委員会活動としてではなく自主的に若手教員のみで集まり、振り返りの会を何回か行った。今年度のFD活動として、自然発生的に実施された新たな試みだった。これはFD若手教員によるFD活動であったと考える。

平成25年度看護学科FD委員会は講師以上の教員に相談・報告しながら、若手教員が中心となって企画・運営を行い、FD研修会や活動報告会が終わるたびに若手FD教員を含む看護学科教員がその未熟さを目の当たりにしてきた。その中でFD若手教員は多くの看護学科教員からアドバイスや指摘を頂くことができた。この経験もFD委員としての責任を見直す機会となった。FD若手教員は企画・運営を行う難しさや困難感を抱きながら学ぶ中で、新たな企画の実施など学科の成果として評価を得られたものもある。個々人の学びだけでなく、組織への貢献について考え、学科のFD活動に携わっていく覚悟が求められている。

おわりに

平成25年度看護学科の方針の一つにサステナビリティの実践がある。平成25年度FD若手教員は年間活動を通して多くの学びを得た。FD若手教員は平成26年度も委員を継続している。平成25年度に課題に残されたことに継続的に取り組むとともに、達成できたことはより質向上を目指して委員会活動に取り組んでいくこと、そして他者評価も得ながら自分たちの成長過程と成長段階を見直し、取り組んでいくことが看護学科のFD活動につながると考える。

引用文献

- 1) 一般社団法人 日本看護系大学協議会「看護学教育質向上委員会」. 若手看護学教員のためのFDガイドライン—看護学教育の質向上をめざして—. 2012.3